

IFHP 百周年記念世界大会に出席して

社団法人国土政策研究会専務理事 小浪博英

(本稿は「新都市」平成 25 年 7 月号に掲載された)

Dr. K. C. Leon の努力により数年前から EAROPH と IFHP とが連携を強化して、EAROPH の会員は自動的に IFHP の会員扱いとなった。これにより、今回の IFHP 大会には EAROPH から 30 名近い会員が参加していた。

会議参加者は名簿で見ると 500 名程度で、英国、マレーシア、オランダ、デンマーク、ノルウェー、エミレーツ、スウェーデン、リトアニア、フィンランド、ドイツ、ポーランド、オーストラリア、フランス、シンガポール、米国、カナダ、ベルギー、インドネシア、アイルランド、イタリア、デンマーク、プエルトリコ、フィンランド、チュニジア、キプロス、韓国、中国、インド、セルビア、スペイン、ポルトガルなど非常に多岐にわたっている。日本からは IFHP 評議員の中井検裕東工大教授、谷口守筑波大教授のほか、藤田直子九大芸術工学研究院准教授など 10 名程度の参加であった。会場は University College London という大英博物館、及び、パリ行きユーロスター出発駅である King's Cross Station からほど近いところで、筆者の泊まった Ruffle's Square の Tavistock Hotel からは歩いて 10 分足らずのところであった。

会議のテーマは” A Tomorrow for Cities” と言うことで、日本語では「都市に明日はあるか」とでも訳すのでしょうか。その内容として、①気候や人種や経済に対して弾力的な都市、②急激な都市化に対応できる変化する都市、③住民の多様な要求に応えられる包容力のある都市とされており、何れもインフラストラクチャーの整備と都市のマネジメントの重要性を示唆している。つまり、ハードが今後とも重要であることに変わりはないが、ソフト面のプランニングとマネジメントの必要性が顕在化してきたと言えよう。

開会式ではアメリカ都市計画協会前会長の Mitchell Silver さんが全体的な話を要領よくまとめてくれた。アメリカは 2050 年には人口 5 億人以上、都市化率 90%になるという。これに対処するためには「P」、つまり計画なくして地域が成りゆくはずはないので、その強いリーダーシップが重要であることを強調された。

初日の夕刻、午後 7 時から EAROPH フォーラムが開催された。フォーラムはノリザ事務総長とハシム前事務総長のリードにより、数十人の参加者のもと、韓国、インドネシア、マレーシア、オーストラリアから発表があった。特にインドネシアが発表したジャカルタの海岸地帯における地盤沈下対策としての巨大防潮堤について議論がなされ、筆者は水質汚濁と津波対策を質問したが、JICA などと十分研究しているとのインドネシア副大臣 Dr. A. Hermanto Dardak 氏の回答であった。

2 日目は 5 つの分科会が用意され、それらは、①都市の拡大に対して私たちは今何をなすべきか、②ロンドン東部、オリンピックパーク周辺の活性化、③ICT 活用等によるスマートシティの実現、④異常気象を含む変化への対応、⑤公平と公正、土地は誰のもの、(以上、筆者の独断で意識しました)となっていた。

夕方閉会式が行われ、イギリス都市計画協会長の Sir Peter Hall さんが締めくくりのスピーチを行った。その中で、優れた計画を作るためには、各地域の科学的レベルを向上させて地域独自に国家経済への貢献を認識すること、科学を生産に結びつける翻訳者を育成すること、大学においては伝統的学部・学科に加えて新しい事象に立ち向かうラジカルな分野を強化すること、きめ細かな金融的支援が可能となる地域に根付いた金融機関を育成すること、都市を資本という悪魔の手から開放し、過度の集中を防止すること、などを述べられた。また、都市計画担当者の強い指導力と責任とを強調され

た。

会議に先立ち、世界で初めての田園都市である Letchworth 視察会が開催されたが、筆者は申し込みが遅かったので参加できず、別途、鉄道で訪ねることにした。King' s Cross 駅から Letchworth Garden City 駅へ、朝 8 時 53 分発のケンブリッジ行きに乗ると、33 分で Letchworth。観光案内所で地図をもらって歩き始めるが道に迷うばかり。地図が正確でない。結局駅周辺の 500m くらいの範囲を見て、落ち着いた住宅地、どこの町にでもあるような商店街と大通り、100 年も前に今と同じ発想を持った人がいたのだと感銘を受けながら 2 時間近くをつぶし、11 時 26 分発でケンブリッジへ向かうことにした。約 30 分で Cambridge 駅。バスで City Center へ。バス停と大学との間にある Grand Arcade と称する大きな商業ビルのため方角を失う。やっと Cam 川のほとりに出てボート遊びを見ながら Mill 食堂で巨大なサンドイッチをほおぼり、歩き始める。数学橋、Queen' s College, King' s College, Trinity College などを見てセンターに戻った。道が複雑で思うようには歩けない。観光客も多く大変。センターからバスで駅に出て、ノンストップ特急で King' s Cross に 49 分で戻れた。

以上を総括して、世界のプランナーの熱気と情熱を十二分に感じる事ができた一方では、学生がコンサルタントに就職希望を出してもその学生達を雇う余裕がない日本のコンサルタントの現状に、何とも言えない懸念を感じざるを得ないロンドン旅行であった。

((社) 国土政策研究会専務理事・EAROPH 理事 小浪博英)



写真1 都市計画協会視察団一行



写真2 レッチワース・ガーデンシティ駅



写真3 レッチワースの都心広場